

# 海軍

## 予科練特攻から

### 遺骨収集へ

岐阜県 泉 信潤

私は、戦争経験足掛け三年、予科練出身の特攻隊の生き残りです。予科練時代は十四歳、十五歳、そして十六歳まで、最後は現在の北朝鮮の元山にいました。が、上官の配慮もあったのでしよう、私は寺の長男ということで生き残った一人です。

昭和二十年八月十六日、終戦の翌日です。元山の第九〇一航空隊の旭部隊の一式陸攻に搭乗の予定で、その時の搭乗員は四十六人おりました。その時搭乗員は

かり集まりました。終戦になって、「これからどうしよう」「生きては帰れない」「離陸できたら蒙古へ行つて馬賊になって生きて戦おう」「みんな沖繩へ行つたからもう沖繩はいい。サイパンへ行こう」と議論は二つに分かれ、決を採ったらサイパンが勝ちました。

八月十七日、サイパンへということになって、一式陸攻に爆弾を搭載して朝から待機しました。すると現在広島県で暮らしておられる江川少佐が、勇み立っている若い隊員の命を何とか助けようという配慮だったのでしよう、「お前らはまだ飛行機の練習も少ないし危ないから、いまから爆弾を一度降ろして小松へ行き、その上で爆弾を積み直してサイパン残存部隊と一緒に特攻する。出発」という偽の命令を言い渡されました。そして爆弾を降ろした飛行機から一機一機、石

川島の小松航空隊基地へ行きました。私は真夜中に搭乗し小松へ着陸しました。一週間ここに監禁されまして「もう戦いは終わった、早く家へ皆帰れ」とのこと、着の身着のまま帰って来たのです。

そのようなことで私は生きて還ってきましたが、私の予科練の戦友たちは特攻隊に志願して死んでゆきました。

今度会う日は 靖国神社

桜の梢の 下で会おう

と、国のために命を捧げたのです。国のため国民を護るために自分から志願したのです。

昭和二十年の一月二十一日、予科練を卒業した日です。分隊長から「一步前へ出ろ」と言われました。

「特攻隊を志願する者は一步前へ出ろ」と言われて、私も志願するぞと一步前へ出ましたが、体は震えていました。すぐには出られず、ぐうーっとこらえて一步前へ出ました。約一二〇人いましたが、皆そうです。そしたら皆一緒でした。ぐうーっと、しかし肩をいか

らせて一步出ました。全員出ました。

この志願することとは命を捨てるということ、自殺するということなのです。誰のためか、国のためなのです。当時は天皇陛下のためといいましたが、今の若い人たちにはそのような考えは理解できないと思います。今は天皇陛下は象徴ですが、しかし当時は天皇陛下が代表するもの、実際には日本なのです。自分の兄弟のため、親のため、日本のために自分は命を捨てる。一人が戦艦にぶち当たれば千人、二千人を殺せるのだと、日本を助けることなのだ、ただそれだけを純心な気持ちだけでひたすら志願しました。

私は当時十六歳。今も私は当時親しくしていた戦友の写真や遺書を持っています。それは予科練の二人です。

一人は「地蔵峠総憲君」（甲飛十三期 飛練三十期）で草薙隊の一員として沖繩への特攻で戦死しました。もう一人は「野村龍三君」（甲飛十三期 飛練三十期）で琴平水心隊として同じく沖繩へ特攻攻撃を敢行し戦死しました。二人とも私と同じく志願したのです。野

村君は私より一月早く生まれました。十六歳十一カ月で沖繩へ突っ込みました。地蔵峠という珍しい姓ですが、その地蔵峠君は私と最後まで同じ班でした。私より二つ歳上で、私を弟のように可愛がってくれました。満の十八歳で、やはり沖繩へ突っ込み、特攻で戦死しました。

私は現在、長野の善光寺の別院である高山の常照山善光寺の住職をしています。住職であることと予科練特攻志願とサイパンがひとつの心の線で結ばれています。

そして平成三年に岐阜県の仏教会が後援して、サイパン島に南溟堂という六角堂の霊堂を造った時に、私は県の仏教会の副会長をしておりましたので、諸手を挙げて賛成して、そして極力応援させていただきました。サイパンへの繋がりが確実なものとなったのです。

私の連れ合いも岐阜県中を回り運動をしましたが、皆さんのご協力もあり、立派な開眼式を挙げることに

できました。しかし、何ということでしょう。今行きますとその観音様に落書きがしてあるのです。観光の若い人たちの仕業でしょう。そして毎年毎年朽ちて汚くなってゆきます。何としてもあれを復元しないと申し訳ないと思い、県や仏教会にも何とかお願いをしているところです。そして私は毎年サイパン・テニアンへ行き、現地の洞窟などに雨ざらしになって散らばっている遺骨を収集して個人的に慰霊をしています。

私がサイパン・テニアンへ行くことを知ったある方は「善光寺の住職というのはよっぽど金があるのでですね、毎年海外旅行している」とおっしゃっているようです。その通り私は毎年海外旅行をしていますが、その海外旅行はサイパン・テニアン以外に行つたことがないので。サイパン・テニアンだけへの海外旅行ですし、全部自費です。ディスカウント切符を取りますと、往復四万四千円、インスタント・ラーメンを持って行けば食費も安く、このくらいならば自費でも行けます。

ただ金がかかるのは現地の案内人を雇う費用で、雇わないで勝手に現地に入るとアメリカ兵にズトーンと撃たれます。この案内人を頼むということで、お金がかかるのが玉に傷ですが、このようなことで、この三年間は毎年二回ずつ行つて遺骨をリュックサックに入れて帰ってきます。

行けば必ず遺骨はあります。平成十年六月にはテニアン島に集中してサイバンは二日間でしたが、十月には一週間テニアン島に滞在しました。

現在、日本は平和だと皆様も経験し体験されていますが、そして本当に平和な日本になったということをお改めて驚かれるでしょう。こんな国が世界にあるでしょうか。現在も世界の各地で宗教の争い、民族の争いが、戦争として行われています。

日本は本当に平和な国になりました。皆さんもかつてこんな時代になると思われましたか。そんなことは絶対思われなかったと思います。あの敗戦の昭和二十年、そして戦後の二十一、二十二、二十三年と、食う

ものも無かったなかで誰がこういう平和を作ったのでしょうか。

それはこの大戦で亡くなられたあの沢山の犠牲者の方々の捨て身のお陰でしょう。あの方々が、この平和な日本の礎となられたのです。だからこそ生きている私たちが若い世代にこの戦争体験の労苦というものを、そして平和の大切さを語り継いでゆくことが必要なのです。

最近はどうでしょう、若い人たちは、援助交際だとか、イジメだとか、どういう世相なのでしょう。昔は純心な気持ちで国を愛し国のために自殺する。自殺を志願した。今はボランティアなどに出て行きます。これも結構なことですが、命を捨てて、自分が身代わりになるというようなことを今考えますか。今はないでしょう。昔はそれをやっただけです。私はそういってことを素晴らしいことだと思えます。そこまででなくとも今の若い人たちに、かつてこういうことがあったのだということを知ってもらい、語り継いでいっていただきたい。

サイパンでも兵隊の中に混じってパンザイクリフから何百人という一般の人が大勢飛び込んだのです。兵隊だけではないのです。しかもテニアンの方では、私は体が参って行けませんでしたが、ある洞穴にはまだ五〇体の遺骨があるそうです。

テニアンにもパンザイク岬というのがあります。ただサイパンとは異なりテニアンでは飛び込みに行ったら、その人たちを米軍がサァーッと囲って、飛び込むことを止めてくれたそうです。そのお陰で相当助かっています。それでもそこへ身投げして死んだ人たちがおります。その近くにロープで降りましたけれども、ロープを五〇メートル、三〇メートル、一〇メートルの梯子を掛けて、それでも足りないので尾紙骨を痛めたのですが、こうして崖を降りるのに二時間かかりました。

そこから五〇の遺骨のあるところへ行ったのですが、あと三〇メートル手前という所で体が参ってしまい、涙を飲んで帰って来ました。上へ上がったの

は夜の九時でした。そして実は恥ずかしい話ですが、その時は警察が警備隊を組織して私の捜索に出る寸前でした。

でも今度は遺骨は登山用リュックサックいっぱい、全部入らないので鞆にも入れたたりしてお連れしました。

その中の一つに頭蓋骨があり、その頭蓋骨があったそばに小さい布がありました。これは一般の民間の方のモンベの先の方の端布です。そしてその側に赤いボタンが四つありました。そして小さな喉仏がありました。母子です、洞窟の中です。

それでもまだサイパンもテニアンにもまだ分からない洞窟が沢山あります。爆破されたものもあります。しかし永く経って雨が降ったりして、ずれてちょっと穴が開く時があります。石をどかすとバカッと聞き、自分一人が入るぐらいです。そこから三〇〇メートルぐらい行ったところにちょうど一人が入るぐらいの穴を見つけ入りました。

それはテニアンで発見した洞窟ですが、水のあると

ころが一カ所ありました。奥行が四〇メートルぐらいありますか、そしてそこにその大きな池があります。マルコの井戸というのですが、そこに手榴弾やら鉄帽や飯盒やらが散在していました。

米軍の手榴弾もあります。日本軍もあります。信管のついているものもあります。遺骨は入口にあり、恐らく入口からダイナマイトを投げ込まれて死んだのでしよう。奥には遺骨はありませんでした。奥の方の人はダイナマイトの爆発が避けられうまく脱走したものと思います。

何十人の方がそこに隠れていたのでしょうか、その方たちは水があつたから良かったのです。その水は美味しいです。深さ二メートルぐらいあるでしょう。透き通つた本当に綺麗な水です。そこにいれば良かったのでしようが、しかしここ以外にはテニアンもサイパンでも水不足でした。水の入った瓶を持ち帰りましたが、これはテニアン島の一番北側で、最後の突撃をした司令部の近くの断崖の途中にあつたものですが、飲みかけで、最後まで飲めずに亡くなられたのでしょ

う。五十余年も経つたサイパンの水です。哀れです。そこには遺骨はもちろん認識票などもありました。

今でもそうしたところには沢山あるのです。ところが、困つたことに、持つて帰つては困るということ、厚生省が私のところへも「何故持つてくるのか、持つて来ては困りますよ、困りますよ」と連絡があります。現地ではテニアンの市長さんたちが「可哀相だから、持つて行きなさい。持つて行きなさい」といいます。また領事館へ届けると「見せては困る。あなたは何だ」といいます。こういうのが現状です。

しかしありがたいことに、向こうでは飛行機に乗る時も「OK、OK」で通ります。日本の空港へ来ると税関では、私を通ると「あれ、ご苦労さんでした」と今まで通れなかつたことは一回もありません。私がこのようなことをやっていることを承知されているのです。「ご苦労さんでした」で、私は持つてくるのです。しかし情け無いことに日本では現在火葬はできないのです。市役所も「申し訳ないですが、県に問い合わせてもできないのです」と。それで私は白木箱に入れて

おります。

また、靖国神社の側の千鳥ヶ淵の霊園の事務所へ行ってお願いしましたが、「ここは厚生省さんの持つて来たものしか入れません」といいます。これが日本の現実なんです。だから私は皆さんが力を出して戦争体験の労苦、悲惨さを語り継ぐことが、若い人たちへ平和の大切なことを示すことになるのではないかと思いません。

実は平成四年の徳島市の新聞に私と同じことが出ていました。現地の方が持つて来ました遺骨があるのですが、テナン島では現地人は全員ロタ島の方へ送られていましたから、テナン島の遺骨は全部日本の関係者ばかりです。しかしサイパンの方では現地人も五千人、日本兵と共に死んでおります。ですから遺骨に日本人以外のものが混じっているものもあるというところで取り扱いに私と同様に困っているのです。

向こうへ行きますと、島民たちは非常に親切です。昭和十九年には陸軍が駐屯しましたが、それまでは海

軍だけで、そこには南洋興発という砂糖を生産する会社があり、現地人にいい給料を渡していたからでしょう。

サイパンは夕焼けの綺麗なところですよ。ところが情けないことに日本人の若い人たちが行って海に入ってキャアキャア泳いで、「夕焼けが綺麗だなあ」と言っているだけなのです。後ろを見れば砲弾の跡が生々しいところですよ。現地の人が残置された大砲などの兵器を集めてシーサイドに置いてあります。若い人たちはその大砲に跨って写真を撮っています。現地の人があるには日本の兵隊さんの血が付いている、魂が残っている」と言うのです。

何とか若い人たちに、そんなことをしないように、せめてそこにはそのような同胞の悲しい魂があるのだということ若いに伝えることが私たちの責任ではないでしょうか。語り部として「戦争にはこういう悲劇があったのだ」と、絶対に戦争はしてはならないと、せっかく勝ち取った平和なのだ。

実は昭和二十年一月、私の弟を高山線の焼石と下呂

の間で起きた列車転覆事故で亡くしました。その列車には私が特攻隊に志願したということを知った母と弟が乗っておりまして。私がいた高知航空隊に面会に来た帰りの事故で、弟は即死、母は重傷でした。

しかしその話は私には内緒でした。それを言うとう軍務に差し支えるとの内緒にしてあったのです。ところが、部隊の主計をしておりました薬師寺さんもお母さんを同事故で亡くされ、薬師寺さんは国へ帰られ、葬式を済まされて帰隊され、その後私は知ったのです。

当時、私は「あそうか、可哀相だったなあ」と思っただけでした。私は特攻隊に志願したこともあって平然としていました。しかし生きて帰って来てお骨を見て涙が出ました。それまで「そんなこと」という程度に考えていたのです。それくらい当時は「日本のために」という気持ちが強かったのです。

単純かも知れませんが、あのころの若い者は皆そんな気持ちを持ちました。そして靖国で会おうと言ったのです。事実そういう時代のそれは大きな悲劇でした。しかし今は平和を決して崩さない、守って行くこ

う、そして、そういった大きな悲劇の下に平和を得たということをよくよく語り継いでいくことをお願いしたいと思います。

こういうことがあります。

陸軍の熊谷飛行学校の教官だった藤井中尉が特攻で戦死されました。その方は学校で大勢の隊員たちに精神訓話をされていた教官だったのです。それもあって藤井中尉は兵隊たちのみでなく自分も特攻に行くぞと志願されました。しかし「駄目だ。お前には奥さんもあり子ども二人ある」などと上官たちは考えておられた。そうしたら、福子さんという藤井中尉の奥様は何をされたか。「私が邪魔になるのだ。それは申し訳ない」と、幼子二人を連れて東京の荒川に入水自殺された。夫のためにですよ。昔はこのような気持ちを持っていた人たちがいて、日本を護ったのです。そして中尉は血書志願されて、それが採用され、特攻隊「神武隊」を指揮して散華されました。

しかし何度も言いますが、そのような人たちの下

に、こういった平和ができたということ、これを私たちは尊いものであるといったことを充分語り継いで、子供達に教えねばならない。これが私たち戦前、戦後を知っている者の責務です。

私は、そのひとつの方法として遺骨収集をしているわけでありませう。

体験記執筆者の泉信潤老師は、平成十一年二月八日、テナン島の洞窟で遺骨収集の際、死亡されました。現地からご自宅に参りました悲しいお知らせの電報には次のように記されていたとのことです。

「二月八日午前十一時ころテナン島カロリナス岬にある堅穴（深さ約三〇メートル）で海岸線に沿って洞窟を探索中、行方不明となり、午後十二時ごろ現地チャモロ人を通じて警察へ通報する。その後陸上から海上を搜索、そして午後五時ごろ警察によりカロリナス岬沖の海中にて遺体で発見……」

ここに謹んで冥福をお祈りいたします。

## ニューギニア特別陸戦隊

### 生き残り、その後の歩み

高知県 岡田浩揮

生きて帰れぬニューギニアと言われる戦闘から、運よく昭和十九年一月内地に無事帰ることができた。

私たち佐世保鎮守府第五特別陸戦隊の生き残り組は、命からがらニューギニア島からパラオ島経由で、昭和十九年一月一日大分県佐伯港に入港したが、「負け戦」のことが外部へ漏れることを恐れた軍部は、全員に対して完全なる「箝口令」を言い渡し、その日のうちに佐伯港から潜水艦で豊後水道を瀬戸内海に入り、広島県呉海兵団のある呉の港に入った。

艦から下りた私たちは、呉駅から列車に乗ってその夜遅く佐世保駅に着き、佐世保海兵団第十分隊（補充分隊）へ入団した。

この第十分隊は、各前線で戦いに負けて戦場から引